

繪本
敵討

岩見英雄錄

第一

七

遠

2509

35-4



門を閉まりたるは義盛の被褥して面を覆せ漢子三四名入りより子く彼僕
城踏付猿街をたると最めは待りて門の傍に影をききあはし母屋小
躍りいそ有を去せし勝兎と下婢に曰く猿街喰せ待りり一人の老婢
是も今日備ひ置るるがけは扱ふ事ども立に戦慄するもなむ成るめて
柱小懸ぎ奥へ入り金銀衣服を捜索て棄掠先從嫌やあらん待女せ
下婢を捕へ竹をもちて出去る當下狢内才子の食客西二名は先大
いささ夏の短夜なる小舉豪の旅行とて大方の時夜徹曉せりうれば
別舎外廳ふきりぬく眠りといひ雨の脚のほき小物音を棄れしは
知る者又はをりりる時をむし猪女の下婢とて曲者二輪車軸を流るる
の晴路を四人の曲者又く引かき輝燈小乃と照して走るは身輝
濡るるもぬく夢に魔りるを地を叫びんとせりあまの足き扱もぬく
動

作人もめもろろいぞ睚小ほり回こそ今雨雨も猪りぬべぬとて
遙く岡ゆる水秀の流るる漲り流るるき流はく河次は近く
程は直駕細き月影乃陰る天乃流泊は只人よと腕小
はる曠系乃烟を籠て技跡よける枯木の秋人のまき怪し孤村は犬乃
有影は你樹の鼻人とて荒涼破らぶとてははしをを何處せり
本州那須郡よきりぬ鹽屋郡阿久津川とてその源は日光山甲孫寺の
湖華叢の瀑より出る黒岩白根の水を舎とて何久は大田か
く末へ下線入り彼坂東を郎とては東國一の大河なる利根川隅
田川小舎の流るる右は毛野川 續日本紀 古くは後世に訛りて衣川といふ
けのくみ 毛野國より出ぬの名なり猿の乃草 小鬼奴川の二階とて冬へ橋
まつふらふ 及へ舟渡りり中州に數十箇の村ありとて入るはよこのゆやうちうと

却脱件の二人は一輩まげの杜の中へ入りてある達堂二人の女を「暗號」
 の候て身うち内より衆を憫せ用事四人の女を引立て進み入りつ、
 又も衆を憫地とほぬ友人の女思ふがう忍み居りて地の敷小居並びい
 中央の小浪才藏奉家その左右の小股大を並利初白沢開治二通
 岩松子助則學生の翌平九郎國行森本東旭秀実なり各自一揆の
 征装寄先がひひらりて勝女もせり輝もたふ再々一驚後と見
 色安達控内盛連赤見軍六宗秋一奴僕大平宗六等被る頭巾と
 脱棄し「齊く面を露し」當下舉豪嗜眼と見用し勝女とつ
 して睨み合ふは「能も岩見を重を命に女次通」それのさうに
 山見れが玉絹を誘出—今令せるの張本の必らぬゆより「殺り」らるべ
 きく某の耻辱とて「下」を今日急の程をいふと暫く「駈め」報ひの

程とせしむれんあなりと響りつて又下輝に向ひぬも彼が不意の使とせ—
 源あせども今仰同仔細を包みぬす免生「少」をも隠さば生まはじ
 ちを揚げ「即」時斬り棄べきぞとて大平小令「輝」の傍索と解せ美
 同はせども「暗」に言さし「終」小勝児が「使」す於文「判」りのはじめ
 ようのふり文画の中へ金めても多し「其」事多く「覚」えたりとて「露」
 々色に「勝」女の首を掉つ身と回互同く毎又降せんも「夢」を停らさる
 縛るを「品」管奉家とて頻に「流」し「恨」めが「軍」六と志を「目」
 ようけく「抱」え上げ「あせ」り「宗」秋が「言」るんせむ「徹」底なる「才」
 花「舉」家「暗」笑ひ「い」つ「ふ」も「ゆ」が「眼」の「明」白なり「費」を「疏」ても「益」分り
 と「明」らめて「死」小「就」遠く「代」は「私」也の「岩」見めも「借」果て「何」より「美」
 と「揚」衝も「解」免は「是」の「夢」を「揚」る「代」は「用」を「解」る「心」の



復仇英雄録後編卷之七
 四



復仇英雄録後編卷之七
 五

おろむに存ををせし早く殺す行んと謀りてわかれはるくを伴
ひて達堂と出阿久は川の岩をこりり下輝を引出て再び猿術
戦をせ奉る家自つ刀を抜て下輝の狗もとと二三刀刺貫せは猪の
見よ目もくれら知も消て包ま佛を念ぶるのそ奉る血刀逆より
勝女が丸の右股のあさりをささ刺貫けば血はさつと逆を返
て同へ若むと元来強忍徳刻の本性なれば快ふお笑ひ又右の右股
に刺貫き置て其刃ぬき其襟を披て左の肩峰より乳の隙を
二三寸厚切し斬割は深く艶うるる雪の肌もはは深倒さつ起つ呻く
は口隠す目も觸らぬけり若く狂上程こそ何れ長るも鬚髪破れと
乱色はよ籠る猿術のいけり解く一やうなく信女の我妻や假令は
殺さるた冤の名と受て罷んふ屍のそも耻はし不義なるぬけりよ

り不義の分の罪ある人こそ御座申るる是と言ひせも果は奉るはた
愕き人やい守んと撲地と蹴外にわく咽喉撃と踏ぬて鋒鋭くはの中へ
刺貫き大地をけり縫付きは消現存の悲凄よ再よけりぬく哀期の
形相男の毛もよつ針なり初る奉るは太平宗六はて支那が死骸
し石を結着て月雨の降てきたる後を急が水信増る河内へいぶ
を扱ればわし沈れぬい無愁かりり奉る初なり今いかあまそり孫
初夜過る頃より集ひ置る渡航小舟をすへちり系て川を渡り
飛が如く小急ぎりる

高野弥兵衛奸計隔山石見兄妹話

山道の金花さく奥の園と伺い天下極大の園はて東山道の極はさ
陸奥の園とよ陸とよ青相通すみちとむつとの訓も亦然がむつとの園と

二あり波岡家の使者の儀館に召付来る宿へ来るに「若葉取等二人を
 見出せぬ竊に尾て見失ふべし別急脚子を遣ひ殿必要の事ありと
 火急小某が儀館を報列らせし」と定弘与助則豊と山城共登平九郎
 ハ二春森本在化秀実の相と部分その城市へ急指向せ其勇を
 以地より控櫃を新に需り齋せ小股利初白沢三通安達連赤尾宗
 秋小隸大平宗六等六人成列退後も勇を分せ及を急二本松乃
 城下より引り安達控内ハ系本城の至留山石系亮茂徳の家長が
 一ゆありて退糧し其色も當家譜策の士麻子田和泉が親き所縁
 ありものてその援助を以て城下小在り何の愁もな居し其平昔よ
 り遠中より親き朋友のまうりる且奉家が同寓の地すその勇子也
 城下人少うさびらば控内是等を己が宅に招き岩刃が又城馬さすに

構へ奉家が妻を竊み出せしむへ退りて其奉家自釋ありぬ尤
 渠万丈不肖の勇さるれば師才の好も某等も力と合せば此にて見を
 仙臺の路を塞ぎて整ふる結構ありや甲りる戦國社士の為ひ事
 何等の遠きも其軍は源内が分源助遊佐孫九郎が子兵馬荒井九
 郎が分十郎等何れも遊伴のたうれば云勢もろく閑官よりも際あれ
 而向きし小思ひ我備も力を併せ申さんと其堂かひ小浪甚危びて
 火急は是等不謀りて城下の旅店を一物色んども知れば又も以地を
 不安達控内己が志小何れも馬を引せし小浪小備つ福嶋白石と
 ながら一歩過り日月十二日小官城初仙臺小近きなが経路漸行し
 城下を小へさし後店み入る休息けまし七遠小行装を更せ
 もと来方へて返り南於街及をさし南に向ひ仙臺を遠くぞ新き

りる小辰は日意の姓字も獲し高野弥兵衛與嘉と稱し往年波岡頭
 忠より賜り龍膽の花號つきも袖殺の章服小深縁さうさる野袴と
 腰揚り不才も鷹羽と泥金を描せ及棒の整い多と載き太刀腰刀小
 征衫も華兵と居し安達控内整連がきめさる駿馬も具鞍とて優
 二跨り赤見軍二素秋は十字槍を持せし後之に居せその餘の金子小股
 大さ魚白以圓治あ達いもさう二本松の士半澤源助遊佐兵衛兼井十郎と
 浪士も打抄せ太平宗六も彼も羽傳正の法も物さる苞のおせさる遊ぬ
 内小実の無き狸櫃その餘に調度もさう持せ餘り破下も到り
 徳館も扱し取し伊達忠の長兄伊達上孫介政景の郎中むりく政景小
 對面やる其は輕は長所所令勇波忠九郎門伏頭忠の家長言
 野弥去清奉家よ此般寡君在諸門依旗下の士岩見重内が子さる

命や中者門藩なる尾乃半刀が女玉絹小密通はひひぬ彼玉絹の寡
 君の宗家也會先り大納言家行岡所所島長信樂采女は信樂の
 盟約さる小依り信樂采女一族の者大岩見が不義と憤りそ涙とて夫
 仇の取小彼をさる弱冠さる武藝も長し臂力亦虎小捕者て取
 中も信樂が家と親む糸女と初光家内の男女七八人を殺害密通の娘玉
 絹と誘ひ出奔し出家封内系系中をさへ居るさる主人甚怒り
 家内分疏も多難と辭色は勿論境も岩見と女が親と書き紙
 と圖り逃捕厳重さるいりり是も依て當も使者集ると紙も進じ
 いろり死に這人相書小似し者大貴國封疆と緋廻しひり早速捕り
 是通達さるべしと補て認遠山石尾種孝兄弟の骨相書と出出白
 川田村等の諸處へ彼等兩人と他系逃中をぬぎるふ己も忠使とて

後伏見本録後録卷之七



後伊弉册金録卷之七



わうひで久は
 奉直家奸計
 ろとらけ
 波岡家の
 使者
 図

後伊弉册金録卷之七

所所の旗下下りるる去りて聖徳去清奉家が奸計もけりし由りき奉
 豪が志の自ら勞せしめて諸侯の子小種季と擒させ已が子一徳取く取らま
 一撥一竊ふ乃て種季を殺す消と奪ひ去んとせしるる君一伊達
 家より行固ま密に別使とて合合するも南都を経て往返たどひ
 るも十餘日の日を歴べし間ふの必定山衣見と捕ふ下りや我謀の露
 るも先早くめを悟りて窺んぬ忠見もせり伊達家あり犯せる
 罪をば後ふ事なく逃放せしむその時路を追て路あり殺えん追致
 捕風の勞もるは上集暫もせし一回彼地禁獄の後されば身体平
 生の如く運動健るる難らるるも暫も安と保くも討りて窺ふ
 門生家隸と西三ちちり城下と南都街及に宿せり伊達家上
 り新屋への密使やと伺りせ其身の強健ふありて岩城三春中村の

三知の城下下りさきまきしきしる岩城三春本なるかおまづききも待居
 あり一の大膽を敵の拳勅たり

色蕉遠関門岩見種季血戦話

去程小伊達上野分政系専ら君伊達左系左支輝峯へ招得
 津軽波岡家より使者とて聖孫去清奉家とせり者とて誠を形
 振らせ云上一つ小輝峯討時三十二歳壯年小の屋敷れども智勇と兼
 良なりをば敵と懸はるるヤサシクハ波系家の尋常なりぬ小島殿乃
 華曹といひ苗家祖先以来門下王事小勅親好の不縁ある名家の囀り
 等閑といひ敵難去らざる尚時争戦の世に色ハ率忽の計も不慮るる去ハ
 ける一徳行固へ密に使者遣確實小実言を完し尤城外小園柵を設ち
 往來の人と竊ふと若似しもの者ゆが只何とぞよく氣付同んぬ罪五者

自然態度詳覧も取せん心定怪き事と見極るが其時何となく抑々
 とまひぬる(是)使の帰るに彼地の復報より如何ともし討ふ勿論の事
 ながら商賚諸人の累ひを扱ひ且派者の備い敬重し居る然れ万幸率
 忽の後悔を扱返くも心をを用ひいとるる小政累も清談義より急ぎを編
 物馴し士を清使とて彼方を周知しんとそ実なれなき清らふゆいとるる
 時小輝子の叔父より信使郡八町目下居るに伊達兵於大輔實元は座
 下在が進出波周家より商賚と許すの遠路るる然るるに其使と世誠
 るに勝龍のるる派派小其岩見とやんとも搦へ得ぬとて先彼方へ使者
 と疑ひ問せらるる見女子乃見も迫り彼犯人が武勇力量の説ふ二足と
 踏しけんぞおもんも如何にせん先其罪人と送り者誠認するにそとなく抑
 留するその時急使を以つてんこせ空く遠路の使と責むるを務りぬらんとり

不ぞ小終小は儀小一使姑く行周家の使者と聞き政累ハ私勇に降り使と
 聖舉家が儀儀を領家の返答速に城外の園門に骨相書法及小旨と傳
 へる令とこそ下なる一両目の園小奉儀の通傳と承て園使小旨を謝するなりと
 私より厚く人情を賜り速く小私好と結び並園中の士率等もも意と着
 酒肴の賄餽金銀の賄賂なんぞ多きもの利欲を耽る人情王きて下賤の
 者ぞこの習ひ深くも是を奪はせ奉儀が種季が考人を尾に鱒と添思
 扱之言る(是)園使とぬ大家のぬ人ながら種季の流はく情むの分と勅する
 も園人情の流(是)取中園使仙石長九郎門がま周馬とつらハ壮年血氣の
 勇に逸り槍劍の術を自負し其志驕慢甚きえせ者るるを奉儀がくつと
 あまを(是)深くも情を結びとき久しその武勇の志を稱賛且先をれば則ち
 人と制するの理り兵に非速を責むるの説を引く取免その武勇の志を勅

さてヤケの山見重太郎着け地々素りぬる尊守云長九清門及寛定の長者を
 色が強き穩任の計ひは終久もなつて去たせぬ人々依て原が如きのを
 乃暴悪の曲者油断てい却て渠が笑は途は下らんどの如き志向ふその失を
 ぶく武勇の及ぬ擬撞と得玉いせれくそいひうり自然不敵の兎僕るを
 家の官府をも掃らん拵格す刀剣を揮ひ官廳を闹せいひやまもろく於
 以若くぞ剣を負ひてつても百捕せむべしとて絶絶の切己自己一人の是候る
 是に此意と獨り公は籠りては返りて身切の切らぬ君家の武威
 とも囉々実な忠義名譽の大勇ろはと後辨と振ひ瞞激るは周馬大
 信んず竊も是と謀ゆるこそ信人人を殺て血を見ざる右段の利母せいこれ
 とこそい言ろる然に城外芭蕉達とて京申明亭のほやうり迫き陣番
 所は構へるなる園柵小仙石長九清門好利同周馬好勝又十餘名の士率

を以嚴重し是を守り往來の人を改め亂百く武勢盛張百八十餘の士率
 とおひく遊歩は後へ君事らうが舞の大鞍と握は速小来り力を係はせや
 定め堅味と吞く服陣は扱へ官道の要衝を梗塞ゆる机勢の假令岩見
 漢土の樊吟我釣の朝夷名義秀を欺く男力者とも頼く虎口を強引べ
 へんさうりり却説岩見重太郎種季は去る九日其生は宿り十日白川の
 城下小入らるが嗣子い免は角田日大田系そ安達控内は逢しより彼君守
 官より一我を見しり成人は語らば忽ち追人の獨りなき愁ひ思ひ其は
 種季もさうぶらと轉り禍を避はせり白川より西小向ひ倉澤を指す外
 くは十一日の昼合は郡永沼の驛より明日合はの城下より遠藤亭
 を求て嗣子成る免は是名名家の彦中新系の武士を召給探り且剣法
 練の士を召ひて一い仇を伺ひ二ッころ坊之の三浦屋より追人ぬる仙臺

徳川御成金録後編卷之七



寛元五年在在録後編卷之十一

十一



後伏見左金将頼朝卷之十

十

べくもあつて... 餘る... 徳武士の咽喉... 霜みの切味... 日向の嗣子... 門が娘... 時すも... ござんせ... 透間... 周馬好勝... 一得ぬ事... 扱脱

喰ひ... 喉... 好利眼... 教を... 餘人... 兄妹... その物小説人の

繪本復仇英雄録後編卷之七 大尾

軍書小説類藏板目錄

大坂心齋橋通 南久寶寺町

伊丹屋善兵衛

源平盛衰記

片假名

廿五冊

後太平記

片假名

廿五冊

殘太平記

同

十二冊

四國軍記

同

十二冊

駿臺雜話

平かな

五冊

續武將感狀記

同

十冊

室鴻巢公羽の著をふりて仁義の大乃と稱して鬼神の託和漢古今名將勇士の言行を評し治亂の要諦兵法和番詩文の備説老儒の見あり

聖徳太子傳圖會

平かな

六冊

楠正行戦功圖會

平かな

十二冊

畫本西遊全傳

四十冊

太田道灌雄飛録

六冊

繪本玉藻譚

五冊

左衛門大夫太田持資入乃を源三位於政卿の後流して相入上杉氏の密謀より文政の英才を祖ふ職する一世の戦功忠義を委く仰ぐ

同白狐傳

十冊

むらさ 妖婦 生駒の方々の陶尾張の晴賢が
大悪逆を正史に出入せし面白記稗史あり

近江縣物語

五冊

花山院の行代ありと坂上梅丸が全傳あり
盗賊を系保輔齋の末が残暴に橋安世が
女園生が貞操安世が甥常人の邪慾狂痴の
梅丸を以て光緒の語して城征伐
の大將軍系保保昌を助けて賊を平らげ
近江掃部進み生の父母逢一佳話してその
文の妙ありて一閱して勿さば

昔語松虫墳

六冊

建武の頃河内野田太郎源氏
武勇妹桂子と御母楓の奸淫安井軍太
悪妻田勝美濃里より聖田の娘本海海ハダ妻
松女が狂烈本河源太郎と神崎の娘木本孝心
松虫墳経塚の由来とある

今昔廿二牧繪艸紙

六冊

天文の頃と播磨國三木の城主別所長宗の娘
菫崎の天女と女守りとの愛の物語
遠原の女と松三郎の物語
村の熊と義氣の物語

忠孝貞婦傳

六冊

大庭伊織信濃八波田段右衛門の女計り
て自室一妻の里人と赤隼田野助の貞烈
忠勇を以て免を賜はるる事あり

復讐言千丈松

七冊

近江の士松井逸舟源人藤村大志の欺殺
れを弄弄兩人三年冤家を宥む月柳位前
の友と阿波の藤村と志と速し

忠孝人龍傳

五冊

奥州小田原の馬場信隆三希右衛門の物語
十田民を欺して松田伊織一斬り
田夫婦と民が子孫を養ひて是を究魂
民が廢子民五郎といふ童二歳に復讐を
させしむる事あり

北野 二葉此梅

六冊

賊の夜賊池上七九帝が克悪の孝子
菊女と上田三郎が復讐の物語
年若見三之丞義侯の老人を教諭する事
を綴りしものなり

報怨 十かえり花

六冊

建久年中出羽の山縣の御士常盤井内記
則則二男三郎と人仙仙誘われて教
け後年諸事を助けて父の仇を山伏小計
仙女去来見と昇天を奇談奇事といふ

楠家 弥生佐久屋

六冊

楠家の長後恩地左近が女見弥生と佐倉源八
の作会兵庫が狂死を子孫二郎が胆車取寺の
殿を除死又津田の里から復讐が女見向を
遇ねて軍を駈御 秋山大膳が縁八毛
童丸が滅亡八流の事あり

花標因縁車

五冊

小難半と清盛と小金と彦麿と併せて
迷ふ煩悩の常念法師が下下の縁の因縁を
怪くする事あり

玉搔頭

五冊

三光の櫛の事を主として話して上野の
高井土の呉服屋十右衛門の娘と再會
と上方に出て百方拵死後三右衛門の金
と推し路摺針山笠り強盗を四回

筑前の士人東條因書幼年して父助を
夫が仇山中狂二郎を年久多く伺ひ捜り後
小和州郡山より復讐せし事實を添い
て尋常の俗奇を紙とて及あり

南部 小栗忠孝記 五冊

奥州南於の士竹内教吾月藩不親善の士
小栗毛平と接み宿願ふ人として討殺させし
小栗が復讐五助終ふ手渡秘をさる得し
阿波吉小外き主の妻子小告知せて小栗
百二郎不悉く父の仇を報せし事實あり

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊

和漢の雜事 何れとなく載れられたる世に
益鮮れし一編にして開くを私くはへし

千辛万苦の心労を盡し大井宿
飯盛河原の女情を計り金と
換へる危難を免れしは
金屋金五郎全傳

金屋金五郎全傳 五冊

浪花堀江の市人金五郎が風情ありて
南妓の情を懐きては
半附唄の勝門の癖性の可い大い後小半時
怪しき事して郷人との二つ就あり

輪廻物語 五冊

安倍仲麻呂が古流大臣の流唐より
善悪を悟り明瞭なる事
既之附合し言小説荒唐して架空の結構
和漢の史外に出し奇話といふ

風流茶人氣質 五冊

繡像復讐山石見英雄録

全 五十冊

南海 玉藻主人 編輯
浪花 一葉斎 歌川芳梅 画

○初編 七冊 糸師人作 玉藻主人詞著
永禄天正の頃流石名嶋の勇士岩見重太郎橋樫李が生さちあり武者修初
世の武功大蛇の害を除去し老親の妖を斬り勇威を始め後子天の橋立あり
廣成成大川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し後小室町殿小奉仕に任
鈴木水正は夜襲れるを同は言聖澤豪が女那淫婦岩瀑孝女新月ホが
鈴木黨の五雄と称する勇士の列傳靈猿悪魚の怪談ホ五輯ありハ益入佳境新話あり

南久寶寺町心齋橋水入

浪花書肆

伊丹屋善兵衛板

